

地域社会分析から捉えるスポーツ活動

後藤 貴浩

Sports from Regional Social Analysis

Takahiro Goto

(Received October 1, 2010)

1. 問題関心

都市社会学者の鈴木広(1986)は、現代における日本人の近隣拒否志向性が、巨大組織への高い吸収度や高い移動率、小家族化などによってもたらされたとし、公共的な場としての近隣関係が発展する余地は乏しいと指摘している。加えて、「ハレ感覚と不可分に成立してきたスポーツは内的必然として、レジャー志向、都市志向性と不可分であり、逆にいえば、近隣志向性とは反発関係」にあることから、ハレ感覚を戦術として発達する余暇産業たるファッション型スポーツ企業によって、日常性の地味なケの空間を忌避し、スポーツはいやがうえにも「非日常」の方向に整形されるとしている。このことから、スポーツ人口の量的増加を目指す政策に対して、「その増加によって、近隣の空洞化が一層進行し、スポーツ参与の不均等がかえって拡大するだけである」と懸念している。

彼は、スポーツ分析の問題性を、「それだけ独立の行動状況として、他の諸生活行動から切り離して把握する近視眼的な危険性にある」と指摘する。例えば、スポーツマンシップ(その形成が近代プロテスタント主義を背景にしていたとすれば)は、「生活そのものが合理的に組織されているような人々に、したがってスポーツや運動がその組織の一部として位置づけられ統御されているような生活態度として、はじめて成立する」とし、スポーツにおける近隣志向性についても同様であると述べている。

彼の主張に従えば、現代社会におけるスポーツは近隣社会とは近い関係にあるとはいえず、スポーツの側から主張されるような地域社会形成への寄与はそれほど大きくないといえる。しかし、彼の主張は具体的な地域社会を分析対象として導かれたものではない。また彼自身が指摘するように、地域住民のスポーツ実践様式は彼らの生活構造によって特徴づけられている¹⁾とするならば、それぞれの地域社会の構造に応じたスポーツの位置づけを確認することが可能であるという

ことになる。そこで本報告では、異なる社会構造にある地域を対象に、綿密な地域分析を通して、地域社会におけるスポーツの位置づけについて検討することを目的とした。

このような地域社会とスポーツの関係に関連し、伊藤ら(2009a)は、「新しいコミュニティ形成」論においてもスポーツが消極的な位置に置かれていることに対して、スポーツ組織が地域において果たすべき役割を理念として明示するだけでなく、実証的な方法でその公共的な位座を明らかにする必要があるとしている。さらに彼らは、中島や玉野らの研究を参照し、地域社会における「潜在的な共同性」と新たに創り出される共同関係、そしてその空間的秩序に着目することが必要であるとし、団地空間における公園管理活動のプロセスについて、実証的な検討を加えている。ここでは、「レジャー・スポーツの『生活拡充』的活動としてのスポーツ実践から、自らの加齢とともに管理的役割を担う『主体』となっていく過程」(スポーツ組織の生活組織化)を明らかにし、このことから、「スポーツ組織は、世帯構成員および地域生活者が抱える諸課題を含みこんだ組織的活動を同時に展開することによって、『自治的コミュニティ』へと変容していく可能性を認め得るのである」と結論付けている(伊藤ら, 2009b)。

伊藤らが主張するように、個別具体的な地域社会とスポーツの関係を、時間的・空間的秩序の中で検討することは重要なことといえる。本研究も同様に最終的には分析対象地域における個々のスポーツ実践(スポーツ組織活動)を様々な地域活動の中に位置づけ検討することを意図しているが、ここでは、対象地域の地域構造分析とスポーツ実践の概要からその関係性を再検討する。つまり、都市社会学の側から示されるような地域社会におけるスポーツの低位について、実証的な確認作業を通じた仮説の提示を意図している。

2. 分析枠組み

本研究では、徳野（2002）の混住化社会の地域分析の枠組みを参考に²⁾、農村社会学系の農村集落構造分析と都市社会学系の来住者コミュニティ分析の両方から相対的に分析を行った（図1）。

徳野によると、混住化社会の具体的な分析局面として、A 混住化の空間的・物理的条件分析、B 混住化コミュニティの現状分析、C 地域組織およびリーダー分析、D 混住化に対する行政対応の分析の4つの局面を想定する。中でも、Bの混住化コミュニティの現状分析が、混住化社会分析の中心的部分をなし、そこでは農村社会学系の村落解体論的アプローチとしての農村集落構造分析（B-1）と都市社会学系のコミュニティ形成論的アプローチとしての来住者コミュニティ分析（B-2）の両方から相対的に分析が行われる。本稿でも、この混住化コミュニティの現状分析が報告の中心となる。

3. 研究の方法

1) 分析の対象

熊本県菊池郡大津町を対象地域とした。大津町は、熊本市の東方約19kmに位置し、古くから肥後（熊本県）と豊後（大分県）を結ぶ豊後街道（現国道57号線）の要衝であったと同時に、阿蘇外輪西部に連なる広大な森林、緩やかな傾斜をなして広がる北部畑地帯、

阿蘇山を源とする白川の豊富な水資源を生かした南部平野の水田地帯を有する農林業の盛んな地域でもあった。現在はJR豊肥本線が町中心部を東西に横断し、国道57号と国道325号が縦・横断すると共に、熊本空港、九州縦貫自動車熊本ICに近接する交通条件に恵まれ県下でも有数の工業集積地域となっている。

このように町全体が混住化社会を形成してきた大津町では大幅に人口・世帯数が増加（1975年：18,086人・4,642世帯、1995年：26,376人・8,187世帯、2010年：30,973人・11,430世帯）している。また、1世帯当たりの人員は減少（1995年：3.22人、2010年：2.71人）しており、極小化が進行している。年齢構成では、年少人口5,035人・生産人口19,784人・老年人口5,901人となっており高齢化率は19.2%と熊本県内では隣接する菊陽町に次いで2番目に低い。

本稿では、地域構造の分析を通して地域社会とスポーツの関係を検討するため、地域構造に鮮明な違いがある地域を比較することとした。具体的には、比較的地域の生活課題が明確化される“複合的混住化”の進んだ2地区（混住A・混住B）、ほぼ旧農家集落で構成され“内からの混住化”が進む地区（農村）、全く新しい土地に形成されたニュータウン（団地）といった異なる地域構造が想定される4つの行政区を分析対象とした。

2) 調査の方法

(1) アンケート調査

①方法

混住A：組長を介して、278戸（全戸）に配布・回

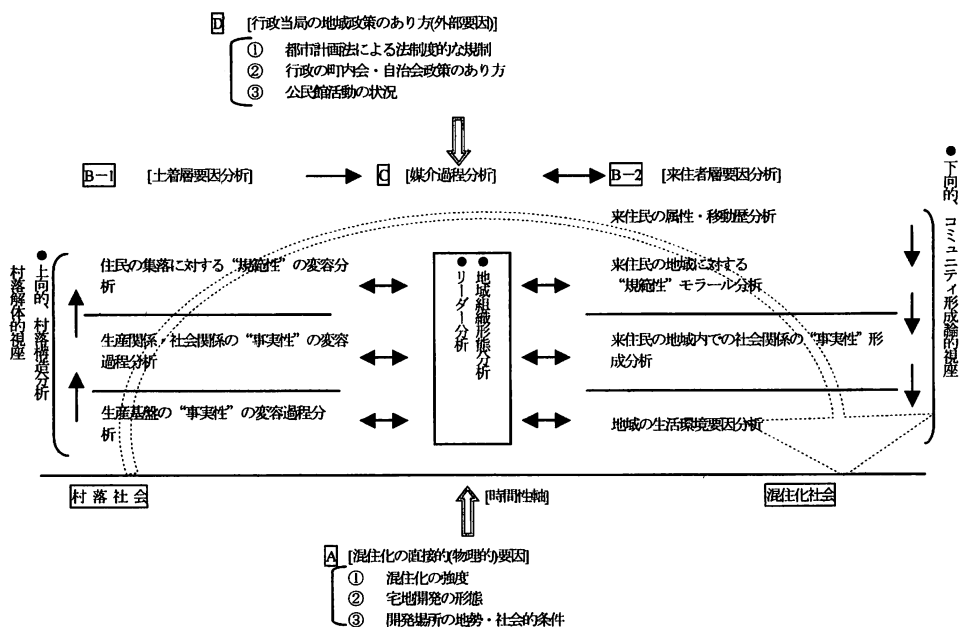


図1 混住化社会の分析枠組み（徳野，2002）

収した（有効回収率：37.8%，回収数：105）。
 混住B：組長を介して、区費を払っている256戸（全戸数は504戸）に配布し、郵送法にて回収した（有効回収率：35.9%，回収数：92）。
 農村：組長を介して、70戸（宅地6戸を除く）に配布し、住民総会時に回収した（有効回収率：64.3%，回収数：45）。
 団地：組長を介して、180戸のうち、自治会に加入している120戸（団地宅地）に配布・回収した（有効回収率：70.0%，回収数：84）。

②調査期間

2009年1月～5月

③調査項目

[基本的属性]

年齢、性別、職種、世帯年収、居住歴、家（家系）の年数、居住形態、来住者の来住形態

[家庭生活]

家族（構成、関係性）、親族（関係性）

[地域生活]

地域の諸行事の内容と参加度、土地・農地に対する意識、地区に対する知識・関心、評価、参加度、地区における仲間意識、地区における慣例・規範・シンボル、地区に対する将来の展望、地区に対する定着志向、地区における主体性、平準性、開放性、地域社会集団への参加状況、近所、友人、仕事仲間との社会関係、生活の目標（私生活主義、地域主義）、マスメディアへの同調性、運動・スポーツの実施状況、ムラに対する理解と関心

(2) インタビュー調査

①対象

混住A：区長

混住B：区長および地域の事情に詳しい者（2名）

農村：区長

団地：区長および地域の事情に詳しい者（3名）

②方法

半構造化インタビュー

③調査期間・時間

混住A：09年1月22日（45分）、2月20日（60分）、3月17日（47分）計3回（152分）

混住B：09年2月20日（55分）、5月15日（90分）計2回（145分）

農村：09年2月25日（75分）、5月12日（84分）計2回（159分）

団地：09年1月23日（30分）、5月13日（87分）計2回（117分）

④調査項目

区の範囲、区の世帯分布地図、宅地開発の状況（歴

史・規模・会社・場所）、今後の宅地開発、家族の状況（関係、世帯構造）、専業農家、兼業農家世帯の確認、農業生産組織と活動内容、町内外サラリーマン、アパート・マンション経営の状況、公民館の場所と管理状況、区の共有財産（公民館、公園、神社、お宮、山林、農地、土地）、土地に対する意識、農地に対する意識、慣例・規範・シンボルの存在、共同体験の蓄積、区の地域行事とその参加度合い、区の行事の運営主体の状況、自治会（組織）の組織体制（組織図）、行政区内の自治組織の形態（イニシアティブ）、生活集団の現状（葬式組、集落組）、婦人会、老人会、青年団、消防団、区内の役割（神社・お宮管理、役、清掃など）、集落住民と宅地住民の地理的關係、集落住民と宅地住民の社会的關係、土地利用形態の規制、市街地（中心地）及び都市（熊本市）との關係（雇用、市場）、地域への評価と展望

4. 結果

1) 対象地域の概要（インタビュー調査より）

【混住A】

世帯数は278世帯、人口605人、高齢化率22.8%となっている。住宅構成の概況は、旧農家集落、新道沿いの宅地（主に雑穀商や金物屋など）、築30年程度の一戸建て団地、近年造成された一戸建て団地、近年建設されたマンション等で構成されている。旧農家集落は34世帯で、専業農家は3世帯である。専業農家のうち1世帯は後継者のいる大規模畜産農家であり、2世帯は後継者はおらず、農業収入のほかにもアパート等の家賃収入がある。山沿いにあるため2反3反の畑中心の比較的貧しい農家集落であった。天神祭などの伝統的行事は旧農家集落で存続している。

【混住B】

世帯数は504世帯（実際に区費を払っている世帯は256世帯）、人口1,433人、高齢化率8.4%となっている。アパートの住人の区費については、アパートのオーナー（旧農家集落住民）が代表して払っており、行政の配布物などは配布される。住宅構成の概況は、旧農家集落の周囲に一戸建て団地とアパートが立ち並んでいる。大型の宅地開発ではなく、地主（旧農家集落住民）が農地を転用し不動産会社に売却する形で開発が進んだ。平地であったことと町の中心部に近いこと、さらに高校、中学、小学校、病院等が区内にあるということから急速に宅地化が進んだ。旧農家集落は、平地の農地と白川の豊富な水があり比較的裕福な農家集落であった。しかし、農業収益と比べて、土地売買

による収益やアパート経営による収益の方が多いため、兼業化・非農家が進んだ。38戸あった農家が、現在では専業農家3戸、兼業農家10戸となっている。地域には旧農家集落住民と子供会が連携して行っている伝統行事（モグラ打ち、子ども相撲など）があり、来住者との交流を図っている。

【農村】

世帯数は76世帯、人口240人、高齢化率35.8%となっている。住宅構成の概況は、旧農家集落と6戸の宅地で構成される。旧農家集落は専業農家6戸、兼業農家34戸となっている。集落営農には専業・兼業計40戸が参加し、後継者のいる農家は1戸のみとなっている。1か月に1回、地区の役員会を開催し、行事や役の相談、予算について話し合っている。役員会は、上、中、下の組に関係なく選出される区長、区長代理、会計に、各組3名及び宅地から1人の評議員を加え、構成される。地蔵祭り、子ども相撲大会などの伝統行事や新たな地区の祭りであるホテル祭りも旧農家集落の住民が主体的に運営している。また、宮座などの集落の役も存続している。

【団地】

世帯数は180世帯、人口487人、高齢化率6.8%となっている。住宅構成の概況は、大型一戸建て団地とアパート（20戸程度）で構成される。30年ほど前に宅地開発が行われ、残りの区画は1～2区程度。アパートの世帯は自治会には入っておらず、交流はほとんどない。開発当初から入居した住民を中心に開始された「ふれあいサンデー」という祭りを自治会で継続して開催している。団地の自治会所有の集会場を建設し、交流の場としている。

2) アンケート調査結果

(1) 調査対象者の属性（表1～表7）

年齢については4地区とも50歳代が最も多かった。農村は旧農家集落が中心であることから80歳以上が比較的多く、混住Aは市街地に隣接していることから年齢幅が広がっている。団地では、大型の宅地開発とともに、ほぼ同時期に移住した人が多く50歳代が半数を占めた。性別では全体として大きな男女差はなかったが、旧農家集落の農村で男性の割合が80%を超え、団地では女性の方が若干多かった。これは世帯調査であったことから、旧農家集落の農村では男性が

世帯の代表者として回答し、一方、団地では比較的家庭にいる時間の長い女性（妻）が回答する傾向にあったと推察される。このことは職業を見てもわかるように、農村では専業・兼業の農家を合わせると38.7%、団地ではパート・アルバイト22.9%、主婦14.5%となっている。複合的混住化の著しい混住B及び混住Aでは専業・兼業農家の割合は混住Bが10.8%、混住Aが5.8%となっており回答者の大半が非農家である。経済状態を世帯年収でみると、市街地に近い新興の宅地と農地を売却したアパートのオーナーなどで構成される混住Bと大型のニュータウンである団地の世帯年収が比較的多く（800万円以上が混住Bは32.8%、団地は21.4%）、旧農家集落の農村と多様な混住化の様相をみせる混住Aでは逆に低い傾向にあった（400万円未満が農村は58.6%、混住Aは46.1%）。世帯構成は、農村と混住Aにおいて若干三世同居が多いものの、全ての地区で世帯が極小化する傾向にあり、特に混住Aでは夫婦のみと単身をあわせて37.8%とその傾向が著しい。地付－来住の別では、農村では集落内地付が82.2%と最も多く、混住Bでは16.3%、混住Aでは17.1%が集落内地付であった。団地、混住B、混住Aにおける来住者の約60%が町外からのI来住者であった。団地では同じ大津町からの移住者（町内地付）が38.6%となった。最後に、大津町におけるイエ（家系）の年数では、農村では79.5%が先祖代々続く家柄であり、混住Bでは同じ先祖代々は31.5%で平成元年以降が49.4%という2層構造を示し、混住Aでは先祖代々27.0%、昭和36年～昭和63年21.0%、平成元年以降27.0%と断続的な移住（混住化）により地区が構成されたことがうかがえる。団地も同じような傾向を示すが、ニュータウン、つまり“何もない”地区に居住を開始した時期は昭和36年以降であり、言い換えれば、地付（町内）と来住者が同時に地区を構成した疑似的混住化地域ともいえる。

(2) 生活の状況

① 家族生活

家族に対する意識では、すべての地区において、伝統的な家族観としての「親や年長者の意見を第一にすべき」という考えと、近代的な家族観としての「お互いの立場や意見を尊重すべき」という考えの両方に肯定的な者が多かったが、より近代的な家族観を支持す

表1 年齢

	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代		70歳代		80歳以上	
	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N
合計(326)	1.2	4	8.0	26	18.7	61	36.2	118	22.4	73	7.7	25	5.8	19
農村(45)	0.0	0	6.7	3	8.9	4	35.6	16	26.7	12	8.9	4	13.3	6
団地(84)	1.2	1	3.6	3	16.7	14	51.2	43	20.2	17	6.0	5	1.2	1
混住B(92)	0.0	0	6.5	6	29.3	27	30.4	28	22.8	21	5.4	5	5.4	5
混住A(105)	2.9	3	13.3	14	15.2	16	29.5	31	21.9	23	10.5	11	6.7	7

表2 性別

	男性		女性	
	%	N	%	N
合計(326)	52.1	170	47.9	156
農村(45)	82.2	37	17.8	8
団地(84)	42.9	36	57.1	48
混住B(92)	53.3	49	46.7	43
混住A(105)	45.7	48	54.3	57

表3 職業

	無職	パート・アルバイト	主婦	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家	商・工の自営	営業・サービス等の会社員	事務系の会社員	製造業等の会社員	介護・看護職	専門的な技術・研究職	公務員・団体職員	管理職
合計(323)	20.1	16.7	15.2	4.0	1.9	4.3	5.3	5.3	1.9	12.1	1.5	1.5	7.1	0.6
農村(44)	22.7	4.5	2.3	11.4	9.1	18.2	9.1	2.3	0.0	11.4	0.0	0.0	2.3	0.0
団地(83)	21.7	22.9	14.5	0.0	0.0	0.0	2.4	9.6	2.4	14.5	2.4	0.0	9.6	0.0
混住B(92)	17.4	15.2	15.2	4.3	1.1	5.4	5.4	3.3	1.1	17.4	2.2	3.3	5.4	0.0
混住A(104)	20.2	18.3	21.2	3.8	1.0	1.0	5.8	4.8	2.9	5.8	1.0	1.9	8.7	1.9

表4 世帯年収

	200万円未満		200万円以上400万円未満		400万円以上600万円未満		600万円以上800万円未満		800万円以上1000万円未満		1000万円以上	
	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N
合計(267)	12.4	33	30.0	80	20.6	55	21.0	56	9.4	25	6.7	18
農村(29)	27.6	8	31.0	9	20.7	6	10.3	3	6.9	2	3.4	1
団地(70)	11.4	8	27.1	19	20.0	14	20.0	14	14.3	10	7.1	5
混住B(79)	7.6	6	27.8	22	15.2	12	26.6	21	12.7	10	10.1	8
混住A(89)	12.4	11	33.7	30	25.8	23	20.2	18	3.4	3	4.5	4

表5 世帯構成

	単身		夫婦のみ		親子(親族の同居を含む)		三世帯		その他(兄弟姉妹等)	
	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N
合計(321)	8.1	26	20.6	66	59.5	191	10.0	32	1.9	6
農村(45)	6.7	3	15.6	7	62.2	28	13.3	6	2.2	1
団地(82)	7.3	6	14.6	12	72.0	59	4.9	4	1.2	1
混住B(91)	9.9	9	17.6	16	60.4	55	9.9	9	2.2	2
混住A(103)	7.8	8	30.1	31	47.6	49	12.6	13	1.9	2

表6 地付-来住

	集落地付き		町内地付き		U来住		I来住	
	%	N	%	N	%	N	%	N
合計(325)	21.8	71	20.6	67	4.0	13	53.5	174
農村(45)	82.2	37	2.2	1	2.2	1	13.3	6
団地(83)	1.2	1	38.6	32	0.0	0	60.2	50
混住B(92)	16.3	15	16.3	15	6.5	6	60.9	56
混住A(105)	17.1	18	18.1	19	5.7	6	59.0	62

表7 イエの年数

	先祖代々		明治以降～戦前		戦後～昭和35年		昭和36年～昭和63年		平成元年以降		分からない	
	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N
合計(309)	33.3	103	5.5	17	5.5	17	18.4	57	32.0	99	5.2	16
農村(44)	79.5	35	4.5	2	0.0	0	2.3	1	6.8	3	6.8	3
団地(76)	17.1	13	7.9	6	3.9	3	35.5	27	32.9	25	2.6	2
混住B(89)	31.5	28	3.4	3	6.7	6	9.0	8	49.4	44	0.0	0
混住A(100)	27.0	27	6.0	6	8.0	8	21.0	21	27.0	27	11.0	11

る者が多い傾向にあった。旧農家集落が中心となる農村でもその傾向は認められ、また、断続的な混住化が進んだ混住Aでは、他の地区よりもその傾向が強かった。家族に対する信頼度はすべての地区で高い傾向にあったが、高齢化・過疎化の進行が著しく、世帯の極小化の影響を受けやすい農村では、他の地区と比べて強く信頼する者の割合が少なかった。

② 親族関係

親族が大津町に居住する者の割合は、農村が77.8%と最も多く、複合的混住化地域である混住Aと混住Bがそれぞれ61.9%、58.2%、さらにニュータウンである団地は50.6%となった。このことから団地は、まったく見ず知らずの来住者で構成されたニュータウンではなく、大津町において、一定程度の地縁・血縁的つながりを有する地区であることがうかがえる。親族との関係では、地区毎の差はあまりなく、約半数が「常日頃から連絡を取り合ったり、行き来がある」と回答し、密接な関係がうかがえる。

③ 地域生活

近所付き合いについては、全体として「一定の距離間」をおいた関係性にあることがうかがえるが、その中でも農村では濃密な関係性を維持する者の割合が他地区よりも多く、逆に地付と平成元年以降の来住者の2層で構成される混住Bは、他の地区よりも近隣の関係性の希薄化が認められる。親しい友人関係では、地区毎の差はあまり認められず、70%以上の者が「たく

さんいる」あるいは「いる」と回答した。このことから、濃密な人間関係の蓄積は、社会全体の流動化の影響のもと、近隣の地域（土地）よりも、その他の生活領域（例えば、学校生活や職場など）で行われているのではないかと推察される。

地域行事の存在については、団地では回答者の全員が存在を認識していた。旧農家集落である農村でも「ある」と回答した者の割合は比較的多く73.2%であった。混住Bでは63.6%、混住Aでは53.0%と低かった。地域行事への参加度（「ある」と回答した者の中で）をみると、混住Aでは他地区と比較して積極的参加群と非参加群が多いことが特徴的である。しかし同地区は地域行事が「ある」と回答した者は53.0%しかおらず、このことを考慮すると一部の熱心な住民によって運営されている姿が浮かび上がる。さらに、具体的な行事の種類（図2）を見ても分かるように、「スポーツ大会」と「清掃活動」を挙げる者が多く、「地蔵祭り」、「天神祭」、「地神祭」といった伝統的地域行事を挙げる者は少なかった。地域行事に対する多様な認識と無関心さが大きな特徴といえる。一方、同じ複合的混住化が進む混住Bでは積極的参加群が少なく、当日のみの参加者もあわせて46.4%しかいない。種類をみると「地蔵祭り」、「モグラ打ち」、「宮相撲」と伝統的な行事を挙げていることから、地域行事の形骸化が示唆される。全員が地域行事の存在を認識している団地では、積極的に参加と当日参加を合わせて75.6%と高く（全く参加しないのは1.2%）、地域住民一体となった行事として「ふれあいサンデー」（宅

表8 家族生活

	家族内では親や年長者の考えを第一にすべきである				家族内でもお互いの立場や意見を尊重すべきである				自分の身の回りに何かあった場合、一番頼りになるのは家族である			
	とても思う	思う	あまり思わない	思わない	とても思う	思う	あまり思わない	思わない	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
合計	13.1	61.9	22.2	2.8	26.8	72.2	0.6	0.3	49.8	47.0	2.5	0.6
農村	16.3	53.5	23.3	7.0	25.6	74.4	0.0	0.0	40.9	54.5	4.5	0.0
団地	12.3	67.9	14.8	4.9	19.5	78.0	1.2	1.2	47.6	50.0	1.2	1.2
混住B	16.5	61.5	22.0	0.0	28.9	71.1	0.0	0.0	56.0	42.9	1.1	0.0
混住A	9.5	61.0	27.6	1.9	31.6	67.3	1.0	0.0	50.0	45.1	3.9	1.0

表9 親族関係

	親族が大津町に居住している		親族とのつきあい			
	はい	いいえ	常日頃から連絡を取り合ったり、行き来がある。	それほど頻繁ではないが、連絡や行き来がある。	盆や正月などの時しか合うことはない。	ほとんど連絡や行き来はない。
合計	60.2	39.8	48.9	39.1	8.2	3.8
農村	77.8	22.2	53.5	37.2	9.3	0.0
団地	50.6	49.4	46.9	38.3	9.9	4.9
混住B	58.2	41.8	47.2	39.3	6.7	6.7
混住A	61.9	38.1	50.0	40.4	7.7	1.9

地開発の当初から入居した住民がリーダーとなり始まったお祭り)が認識されていることがうかがえる。回答者の73.2%が地域行事があると答えた農村でも、積極的に参加と当日参加を合わせて71.0%と高く(全く参加しないは6.5%),地域に根付いた行事の存在がうかがえる。その種類をみると、「ホテル祭り」「神社祭り」が多く、前者は行政支援のもと「大津町日本一まちづくりミニ特区事業」として2004年から開催されている行事であり(事業終了後は、地区で独自に開催している)、後者は農家集落に受け継がれた伝統的行事である。

地域集団への所属をみると、農村では他地区と比較

して神社の氏子・寺の檀家や商工会・農協等への所属が多く旧農家集落の特徴を表している。団地では伝統的な地域集団が存在しないため町内会・自治会への所属が多い。混住Bと混住Aでは所属なしの割合が比較的多く、特に混住Bでは町内会・自治会への所属も少ない。このように、先の地域行事の在り方と同様に、地域集団への所属においても各地区の地域構造に強く影響を受けていることが分かる。ところが、「スポーツ」についてみると、先の地域行事では全ての地区で「スポーツ大会」を地域行事と認識している者が一定程度存在しており、また地域集団では全ての地区で同じような割合でスポーツ集団に所属している者が存在

表 10 地域生活

	近所付き合い				個人的な悩みを相談できる親しい友人			
	心をうちわって、ざつぱらんに話したり相談したりする。	お互いの生活を大切にしながら節度を持って付き合う。	ほどほどに調子を合わせるようにする。	必要最小限のことに限って付き合う(挨拶程度)。	たくさんいる	いる	あまりいない	まったくいない
合計	8.6	61.2	13.5	15.7	8.6	67.3	20.1	4.0
農村	17.8	62.2	11.1	8.9	8.9	62.2	22.2	6.7
団地	7.2	60.2	15.7	16.9	13.3	60.2	21.7	4.8
混住B	4.3	56.5	15.2	20.7	6.5	72.8	17.4	3.3
混住A	9.5	65.7	11.4	13.3	6.7	70.2	20.2	2.9

	地域行事の有無		地域行事への参加度			
	ある	ない	準備から運営まで積極的に関わっている。	だいたい当日は参加している。	あまり参加していない。	まったく参加していない。
合計	71.2	28.8	18.9	47.7	23.0	10.4
農村	73.2	26.8	22.6	48.4	22.6	6.5
団地	100.0	0.0	18.3	57.3	23.2	1.2
混住B	63.6	36.4	7.1	39.3	35.7	17.9
混住A	53.0	47.0	30.2	41.5	9.4	18.9

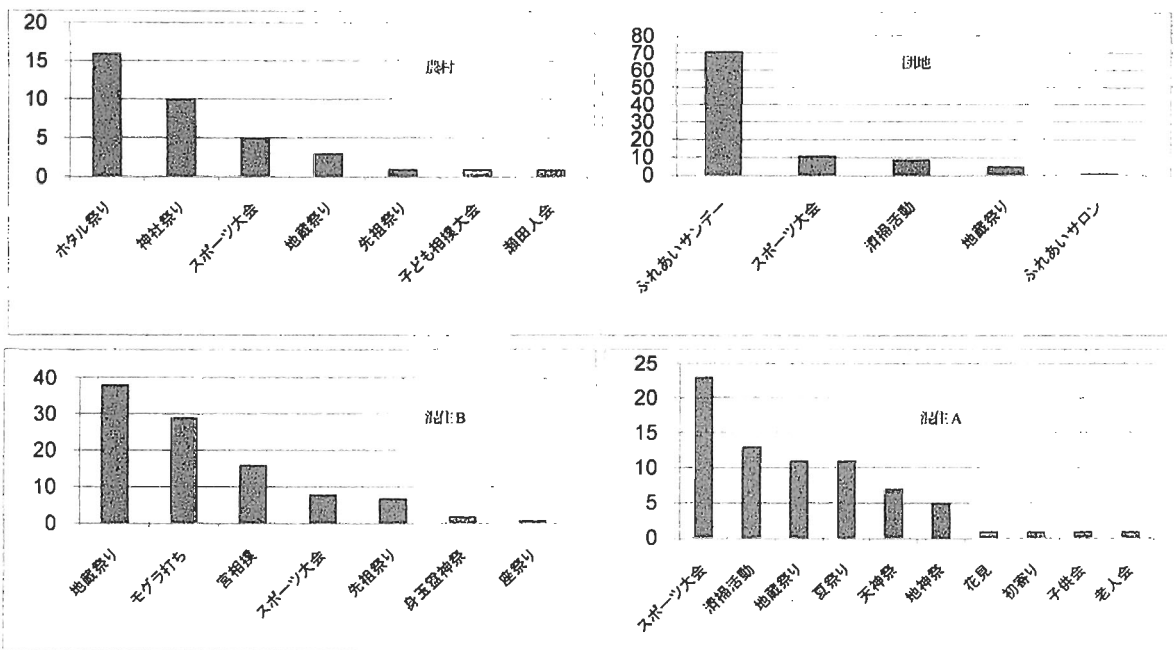


図 2 地域行事の種類

表 11 地域集団への所属

	町内会・自治会・防犯協会	PTA・子ども育成会	地域婦人会	地域青年団	消防団	老人会・老人クラブ	神社の氏子会・寺の檀家や講	商工会・農協・漁協など同業者組合	スポーツ・趣味・娯楽の団体サークル	文化・学習サークル	所属なし
合計	48.5	13.8	2.8	0.9	2.5	6.1	12.9	8.3	28.2	4.3	17.8
農村	31.1	13.3	0.0	0.0	11.1	11.1	28.9	24.4	28.9	6.7	8.9
団地	69.0	11.9	4.8	0.0	0.0	3.6	1.2	1.2	28.6	3.6	13.1
混住B	35.9	16.3	3.3	3.3	2.2	5.4	16.3	7.6	28.3	4.3	23.9
混住A	50.5	13.3	1.9	0.0	1.0	6.7	12.4	7.6	27.6	3.8	20.0

している。このことは、地域生活者にとって、スポーツは地域構造の影響をそれほど受けずに普遍的に浸透していくものと考えられる。また、地域行事への無関心層の多い混住Aで「スポーツ大会」を地域行事として捉える者が最も多かったことから分かるように、地域の紐帯となるべきものが何もないような状況では特に「スポーツ」がその重要な役割を担うのではないかと推察される。

④ コミュニティ・モラル

コミュニティ・モラルとは、地域社会に対する積極的関心の度合いのことであり、鈴木(1986)によると、「コミュニティの知識・関心」、「一体化の感情・受益感(評価度)」、「参加度」の3つの要素を総合したものと捉えることができるとされている。

地区に対する知識・関心では、団地が最も高い数値を示した。「とてもそう思う(詳しく知っている)」と「そう思う(知っている)」を合わせると、「地区の範囲」では94.0%、「シンボルや誇りの存在」では45.5%、リーダーの選出方法では91.5%であった。「地区の範囲」については、特に、団地と農村で高い数値を示したが、前者は造成された宅地団地であり、後者は旧農家集落が中心となっており、地理的構成が明確であったことが影響していると思われる。その点、混住Aは旧農家集落の周囲に、旧道沿いの商工業店、古くから造成された宅地、アパート、近年建設された集合住宅(マンション)などが順次組み込まれ複雑な地理的構成を成しているため最も低い数値(66.1%)になったと思われる。「シンボルや誇りの存在」については、どの地区も低い数値を示した。いずれの地区にも伝統的な地域行事(宮相撲、神社祭り、地藏祭りなど)や新たな地域行事(ふれあいサンデー、ホタル祭り、スポー大会)、さらには様々な共有財(神社、お宮、自然的環境、集会場など)が存在しているが、いずれも地区のシンボルや誇りとなるまでには至っていないことがうかがえる。「地区のリーダー(自治会や町内会、婦人会の役員など)の選出方法」については、団地とともに、農村が高い数値を示した(85.4%)。これは、いわゆるコミュニティモデルとしての要素を示す団地と、旧農家集落から引き継がれた「顔の見える」関係性が基盤となっている地域共同体的な農村と

では大きく性質が異なるものであると考えられる。

地区に対する評価では、いずれの地区も比較的高い数値を示した。中でも、混住Bは、その地理的環境の快適性(病院、学校、ショッピング、交通など)から、住みやすいと答えた者が、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせて92.3%、永住希望も84.8%と高い数値を示した。ところが、「この地区に住んでいるみんなは、お互いに何かと世話しあっている」という一体感の感情については、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせて45.6%という最も低い評価となった。この項目について、農村では76.2%、団地では71.4%と高い数値を示しており、コミュニティモデルとしての団地や地域共同体的要素を残す農村と比べ、実質的な一体感は乏しい状況にあるといえる。

地区に対する参加度では、地区間で大きな差は認められなかったものの、混住Bではいずれの質問項目でも最も低い数値を示し、ここでも団地と農村と比べると住民の主体的行動は読み取れない。一方、同じ複合的混住化地域である混住Aは、地区への意識・関心や一体感は低いものの、地区への参加度は比較的高い数値を示した。これは、多様な住民層と地理的構成で成り立つ混住Aでは、様々な価値観が渦巻く一種のアノミーの状態にあるものの、旧農家集落の急激な衰退と居住期間の長い宅地住民及び近年のマンション住民の勢力拡大により、次第に個人的関心をベースにした要求行動が現れるようになったのではないかと推察される。また、明確な生活課題(農業収入の減少、道路や交通機関の未整備など)を抱える農村では、行政に対する要求行動を強く求める層が一部に存在しており(32.6%)、旧農家集落住民の価値意識に基づいた客体的行動体系と理解される。

(3) スポーツ活動の状況

住民のスポーツ実施状況は、定期的なスポーツ実践者(週に1回以上)の割合をみると混住Aが42.7%と最も多く、農村が28.6%と最も低かった。実施相手については、全体として近年の強い健康志向の影響を受け「一人」で行う者が多かった。また、各地区の地域構造との関連から検討すると以下のことが推察される。多様な層で構成されている混住Aでは、様々な家族観や近隣志向性の違いが存在しているため、スポー

ツを一緒に行う相手についても「一人」「家族」「近所の人」に分散したと考えられる。このような状況はニュータウンでありながら順次に疑似的混住化地域を形成してきた団地でも見られる。混住Aと同じく複合的混住化地域であるがその形成過程が異なる混住Bでは「近所の人」と行う者の割合が少ない。これは急激な農家集落の衰退と近年の新興住宅の拡大に伴う近隣

志向性の減退が影響していると考えられる。一方、主に旧農家集落で構成される農村では様々な形で近隣関係が残存していることから他の地区と比較して「近所の人」と行う者の割合も多い。しかし、少子、高齢化、跡取りの流出による家族の極小化という構造的変化は避けられず「家族」と行う者の割合は少ない傾向にある。

表 12 地区に対する知識・関心

	地区の範囲を知っている。				区のシンボル、誇りがある。			
	詳しく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	知らない	とても思う	そう思う	あまり思わない	思わない
合計	21.2	58.3	17.4	3.1	6.0	28.1	51.7	14.2
農村	27.9	60.5	11.6	0.0	7.9	15.8	68.4	7.9
団地	30.1	63.9	4.8	1.2	10.1	36.4	45.6	8.9
混住B	17.4	59.8	17.4	5.4	4.8	19.0	54.8	21.4
混住A	14.6	51.5	30.1	3.9	3.0	34.7	47.5	14.9
	地区のリーダーの選出方法を知っている。							
	詳しく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	知らない				
合計	18.3	44.5	24.6	12.6				
農村	17.1	68.3	9.8	4.9				
団地	42.7	48.8	6.1	2.4				
混住B	6.7	40.0	31.1	22.2				
混住A	9.6	35.6	39.4	15.4				

表 13 地区に対する評価度

	この地区は住みやすい環境にある。				この地区にできるだけ長く住みたい。			
	とても思う	思う	あまり思わない	思わない	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
合計	18.8	66.5	13.2	1.6	17.8	64.2	15.3	2.8
農村	14.6	61.0	22.0	2.4	19.0	69.0	9.5	2.4
団地	21.4	61.9	15.5	1.2	11.0	68.3	15.9	4.9
混住B	22.0	70.3	6.6	1.1	26.1	58.7	13.0	2.2
混住A	15.5	68.9	13.6	1.9	15.2	63.8	19.0	1.9
	この地区の住民はお互い世話をし合っている。							
	とても思う	思う	あまり思わない	思わない				
合計	6.0	55.0	34.9	4.1				
農村	11.9	64.3	21.4	2.4				
団地	2.4	69.0	26.2	2.4				
混住B	6.7	38.9	50.0	4.4				
混住A	5.9	53.9	34.3	5.9				

表 14 地区に対する参加度

	この地区のために何か役に立ちたい。				この地区の行事に積極的に参加したい。			
	とても思う	思う	あまり思わない	思わない	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
合計	6.6	62.1	28.4	2.8	9.3	69.6	18.9	2.2
農村	12.2	58.5	24.4	4.9	11.6	62.8	23.3	2.3
団地	7.3	68.3	20.7	3.7	9.5	78.6	9.5	2.4
混住B	4.4	56.0	38.5	1.1	8.8	60.4	28.6	2.2
混住A	5.8	64.1	27.2	2.9	8.7	73.1	16.3	1.9
	地区の生活改善のために行政に働きかけをすべきである。							
	とても思う	思う	あまり思わない	思わない				
合計	16.2	69.8	13.1	0.9				
農村	32.6	53.5	14.0	0.0				
団地	13.8	71.1	13.3	2.4				
混住B	14.3	67.0	18.7	0.0				
混住A	13.5	77.9	7.7	1.0				

表 15 スポーツ実施状況

	運動・スポーツの実施率				運動・スポーツの相手			
	1週間に3回以上	1週間に1~2回	月に1~3回	非実施	一人で	家族	近所の人	会社の同僚や友人
合計	16.4	19.6	21.1	42.9	38.8	24.0	20.8	16.4
農村	16.7	11.9	23.8	47.6	40.0	10.0	30.0	20.0
団地	17.9	17.9	20.2	44.0	41.7	22.9	20.8	14.6
混住B	13.6	18.2	27.3	40.9	40.7	27.8	14.8	16.7
混住A	17.5	25.2	15.5	41.7	34.4	26.2	23.0	16.4

5. 考察と今後の課題

混住Bは生活満足度が高く、コミュニティ・モラルも比較的高いものの、実質的な一体感は乏しい。旧農家集落の住民が子供会などと協力し、伝統的行事（宮相撲、モグラ打ちなど）を運営するなど、いわゆるグッドコミュニティ形成への動きもみられる。混住Aは、スプロール的に構成された複合的混住化地域である。地区住民の生活構造や価値観は多様であり、コミュニティ・モラルは高いものの、地区全体の一体的感情や結合度の低い地区である。このため、地区のシンボルとなるような地域行事が存在せず、地域活動も2極化している。しかし、旧農家集落や宅地団地などのそれぞれの居住区域での行事や地域活動の存在が認められ、その中で一定の関係性が確認される。一方で、大津町に親戚が居住し、比較的緊密な関係性を維持している者の割合も多い。つまり、混住Aの住民にとってのコミュニティ感覚は、それぞれの個人・世帯の生活構造や規範に規定され、行政区よりも小地域の生活空間において認識されるか、あるいは、行政区を超え大津町という枠に内包されつつあるといえる。団地は、“何もない”地区に居住した、いわゆるニュータウンであるが、居住後20年～30年以上経過する世帯も多く、また、町内地付の者の割合も多い。地域行事が根付き、地区住民のコミュニティ・モラルも高い。先住者をリーダーとする開かれた地区運営が行われており、グッドコミュニティとしての様相がうかがえる。農村は、旧農家集落で、少ない世帯数で構成されるため、“顔の見える関係”が維持されている。その中で、伝統的行事や地域組織は運営され、生活構造や規範の変容は認められるものの、地区としての一体感や地域生活の実体感が醸成・蓄積されている。非農家の増加による生産基盤の変容は避けられないものの、地区住民は、集落の持つ機能を十分に評価しており、地域活動への積極的参加がうかがえる。

「スポーツ」についてみると、全ての地区で「スポーツ大会」を地域行事と認識している者が一定程度存在しており、また地域集団では全ての地区で同じような割合でスポーツ集団に所属している者が存在している。その中で、地域行事への無関心層の多い混住Aは「スポーツ大会」を地域行事として捉える者が最も多く、定期的スポーツ実践者の多い、いわば“スポーツの盛んな地区”といえる。しかし、スプロール的に混住化が進んだため地区全体の統一感や連帯感は乏しくスポーツ活動そのものは、自立した個人の生活拡充のための活動として浸透している。同じく混住化地域である混住Bでは、近隣関係が減退し、健康志向を中

心とした個人的あるいは家族内のスポーツが実践されており、旧農家集落と新興住宅の住民をつなぐ地域行事（地蔵祭り、モグラ打ち、宮相撲）が存在するなかでは、スポーツ行事そのものは地域行事としての認識は薄い。一方、生活構造の現代的影響を受けつつも古くからの共同体の関係を引き継ぐ農村や宅地開拓当初からの入居者をリーダーとし積極的な地域づくりに取り組んできた団地では、地域の祭り（ふれあいサンデー、ホタル祭り）や共有財産（集会場、山林）を有しており、スポーツそのものは地域社会においてそれほど重要な位置を占めていない。

しかし、インタビュー調査からは次のような事実も明らかになっている。団地では、宅地開拓当初からの入居者を中心にソフトボールチームが結成され今なお活動中である。彼らは試合や練習のあとの宴会を楽しみとしながらその都度メンバーの自宅に集まっており、現在では地区の共有財産である集会場がその場となっている。そして、このソフトボールチームでは次期区長となる人や役員となっている人たちも活動している。また同地区で開催されている「ふれあいサンデー」のプログラムには必ずスポーツ活動が組み込まれている。混住Bでは、旧農家集落に継承された行事として宮相撲（子ども相撲）大会が地域の行事となっているが、後継ぎのいない旧農家世帯と子どものいる団地世帯との関係をつなぐ交流の場として位置づけられている。

以上のようなことから、現時点においては以下の仮説が提示されるのではないかと考えられる。第一に、地域社会構造の在り方によって地域社会とスポーツの質的な関係性が規定されている。つまり、地域住民のスポーツ活動はその置かれた地域社会の状況によってその社会的な意味が創出される。第二に、スポーツ活動そのものと地域社会あるいは地域社会形成は直接的に結びつくものではなく、個人生活としてのスポーツが世帯や集団を通して他の地域生活に組み込まれたときにその関係性が生じてくる可能性がある。

本報告では、このような仮説を提示するに留まるが、今後は、例えば団地のソフトボールチームのメンバーと自治会や集会場管理との関係、「ふれあいサンデー」におけるスポーツの位置づけ、また、混住Bにおいて「宮相撲」は子ども（世帯）を通じた交流となっているが、それが地域社会においてどのような意味を持つのかなど、個別具体的な活動を対象に実証的な調査研究を継続し、仮説の検証を行うことが課題となる。

参考文献

後藤貴浩（2008） 農山村の生活構造と総合型地域

スポーツクラブ：生活のあり様とスポーツ実践の
関係性に着目して。体育学研究, 53 (2) :375-389.

伊藤恵三・松村和則 (2009a) コミュニティ・スポー
ツ論の再構成。体育学研究, 54 (1) : 77-88.

伊藤恵三・松村和則 (2009b) 団地空間における公園
管理活動の展開とその変容－垂水区団地スポーツ
協会の事例－。体育学研究, 54 (1) : 107-121.

松村和則 (1978) 「地域」におけるスポーツ活動分析
の一試論－宮城県遠田郡涌谷町洞ヶ崎地区の事例
を素材として－。体育社会学研究会編 体育社会
学研究七 『スポーツ政策論』。道和書院：65-98.

松村和則・前田和司 (1989) 混住化地域における
「生活拡充集団」の生成・展開過程－「洞ヶ崎」
再訪－。体育社会学研究会編 体育・スポーツ社
会学研究 8 『スポーツの社会的意味をさぐる』。
道和書院：119-137.

鈴木広 (1986) 『都市化の研究』。恒星社厚生閣：
434-464.

徳野貞雄 (2002) 現代農山村の内部構造と混住化社

会。鈴木広監修 シリーズ社会学の現在 2 『地
域社会学の現在』。ミネルヴァ書房：231-237.

注

- 1) このことに関連して後藤 (2008) は、私化・流動
化という社会全体の傾向の中、土着性を基盤とす
る農山村生活者は、スポーツの実践様式におい
ても集団性・地域性が認められることを明らかにし
た。しかし、そこでは個人の生活構造が焦点化さ
れており、具体的な地域社会構造の綿密な分析を
欠くことから、地域社会とスポーツの関係性につ
いて議論するには至っていない。
- 2) 混住化地域社会におけるスポーツ活動に関する研
究では、松村らの研究 (1978, 1989) を参考にさ
れたい。